

SHOW HEY シネマール

★★★★

海角七号／君想う、国境の南 (海角七號)

2008年・台湾映画

配給／ワーナー・ブラザーズ映画・103分

2014 (平成26) 年6月22日鑑賞

TOHOシネマズ西宮OS

Data

監督・脚本：魏徳聖 (ウェイ・ダー
ション)

出演：范逸臣 (ファン・イーチェン)
／田中千絵／中孝介／梁文
音 (レイチエル・リャン)／
林曉培 (シノ・リン)／蔭山
征彦／林宗仁 (リン・ゾンレ
ン)／馬念先 (マー・ニエン
シエン)／民雄 (ミンション)
／應蔚民 (イン・ウェイミン)
／麥子 (マイズ)／馬如龍 (マ
ー・ルーロン)

👁️👁️ みどころ

台湾のNO1ヒット作がやっと日本へ上陸！朝鮮も台湾も日本が占領・統治していたが、その国民性の違いは？日本への反日度、親日度は？同時進行する今昔2つの恋愛劇をホントに理解するためには、そんな視点も必要だ。

ちなみに、クライマックスで涙を流すためには、シューベルトの『野ばら』を知っていることが不可欠。したがって、おじさん、おばさんたちは涙を流していたが、さて今ドキの日本の若者は？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■あなたは『海角七号』を観たか？それがあいさつに■□■

人口4800万人の韓国で最大観客動員した映画がポン・ジュノ監督の『グエムル 漢江の怪物』(06年)で1301万人。それに対して、人口2200万人の台湾で08年8月に公開された本作は、08年10月で100万人と台湾の最大観客動員数を突破。さて、その最終観客動員数は？外国映画を含めても本作の上をいくのは『タイタニック』(97年)しかないというから、すごい。

日本でも人気テレビドラマがヒットしている時は、「昨日〇〇を観た？」が友達同士のあいさつ代わりになるが、台湾では「ハイジャオ・チーハオ (海角七号) を観た？」があいさつ代わりになるほどの社会現象を引き起こしたらしい。そんな映画がやっと日本でも2010年1月に公開されることに。こりゃ楽しみだ。

■□■監督は？主演は？■□■

しかして本作の監督は？俳優は？残念ながらそれらは私には知らない名前ばかり。だっ

て、魏徳聖（ウェイ・ダーション）監督は本作が長編初監督作品だし、主役の阿嘉（アガ）を演ずる范逸臣（ファン・イーチェン）も、台湾ポップス界では有名らしいが、映画主演は初なのだから。また、本作の友子役に中国語（北京語）をしゃべる日本人女優として抜擢された田中千絵も、私には全然馴染みのない名前。彼女は『頭文字<イニシャル>D THE MOVIE』（05年）とアジアのスーパースター周杰倫（ジェイ・チョウ）の代表曲『七里香』（04年）のMVに出演したことをきっかけに、女優として中国語を学ぶ重要性を感じて、06年に単身台湾に渡り、現在台湾を拠点に活躍しているらしい。映画の中では、周りの人たちが台湾語をしゃべるため、せつかく学んだ北京語がなかなか通用せずイライラする彼女の姿が登場するが、今年4月から中国語会話を学んでいる私には、彼女の発音が一番わかりやすい。

それはともかく、そんな監督と俳優によってわずか1億5000万円で製作された本作が、なぜ社会現象を引き起こすほどの爆発的ヒットに？さあ、それをじっくり検証しよう。

■□■同時進行する2つの物語の共通点は？■□■

日本によって占領・統治されていた太平洋戦争（大東亜戦争）中の朝鮮と台湾は、日本の敗戦後極めて特殊な立場に置かれたが、反日気運の強い朝鮮に対して、台湾は親日的？多数の日本人が移り住んでいたその時代の台湾においては、当然日本人男性と台湾人女性との恋も芽生えたはずだが、日本国敗戦となれば、日本人が日本に帰国するのは仕方ない。

本作では、台湾にやって来た若い日本人教師（中孝介）が、恋に落ちた日本名を小島友子という台湾人女性と別れて日本に帰国する姿が幻想的に描かれる。もともとそのストーリーは本格的に展開されず、スクリーン上の節目、節目に登場するのは、蔭山征彦がナレーションで語る友子に宛てた手紙。それが海角七号という住所の小島友子に宛てた7通のラブレターだ。しかし、そんな古い手紙が今なぜ登場するの？台北でミュージシャンとなる夢が破れた失意の主人公阿嘉は、今ギターを叩き壊して台湾の最南端にある故郷恒春（ハンチュン）に戻ろうとしていたが、そんな負け犬みたいな生き方でホントに大丈夫？ちゃんと故郷へ戻って仕事を見つかることができるの？

それに続いて描かれるのは、自分もモデルなのにポスター撮影のアシスタントとしてカメラマンやモデルたちにこき使われている友子（田中千絵）の姿。「私だってモデルなのに・・・」とつぶやくが、そんなつぶやきも阿嘉と同じく負け犬の遠吠え気味？

そんな超現実的な今風の阿嘉や友子の問題と、約60年前の恋物語には一体どんな繋がり？それがサッパリわからない。唯一共通するのは、友子という名前だけだが・・・。

■□■ラブレターの書き方の教科書がここに■□■

「ラブレターもの」の最高傑作は、岩井俊二監督、中山美穂主演の『Love Letter』（95年）？他方面白い名作は、石坂洋次郎原作で吉永小百合主演をはじめとして何度も映画化された、『青い山脈』における「変しい変しい私の変人新子様」というラブレター。ラブレターと聞けば、誰でもそれを書いた経験のある懐かしい青春時代を思い出すはずだが、今年はなぜか『60歳のラブレター』（09年）、『引き出しの中のラブレター』

(09年)など、心温まる「ラブレターもの」が多い。

そんな視点で本作における蔭山征彦の小島友子に宛てて書いたラブレターの朗読を聞いていると、「あの時代」の男たちの文章力に脱帽。とりわけ、「僕が向かっているのは故郷なのか、それとも故郷を後にしているのか」というフレーズは女性の心にズシリと重く届くはずだ。もっとも、これは文章力だけで成り立つものではなく、それ以上に大切なのは感受性と観察力。台湾から一人船に乗って日本に引き上げざるをえなくなった敗戦

直後の若い日本人教師が想うのは、当然恋に落ちた日本名を友子という台湾人女性のことばかり。その想いを一人船の上で書き綴った文章は、「1945年12月25日、友子、太陽がすっかり海に沈んだ。これで本当に台湾島が見えなくなってしまった。君はまだ、あそこに立っているのかい？」というものだ。ラブレターを書くのに、手練手管は無用。自分の感性を研ぎ澄まし、心に感じたものをそして目で観察したものをそのまま文章にすればいいわけだ。そんな視点で本作を観れば、本作はラブレターの書き方の教科書と言えるのでは？

■町おこしの方法論は議長が勝利したが・・・■

本作のメインの物語は、上野樹里主演の『スウィングガールズ』(04年)や竹中直人主演の『僕らのワンダフルデイズ』(09年)と同じような、バンド結成にまつわる物語。その最初の論点は、日本人歌手中孝介を招いて近く行われる町おこしのビーチ・コンサートの前座として、主宰者のホテル側は既に手配した台北のバンドを主張したのに対し、洪議



『海角七号／君想う、国境の南』発売・販売元：マクザム
(C) 2008 ARS Film Production. All Rights Reserved.

長（馬如龍／マー・ルーロン）は地元の若者による新バンドを使うことを主張するというもの。結局、強引な洪議長の主張が通ったため、急遽友子を通訳兼世話係として新バンド結成に向かったが、そこに集まる人間たちの絡みが『スウィングガールズ』や『僕らのワンダフルデイズ』と同じように本作のメインの物語。

まず、ギターとボーカルは曲がりなりにもプロを目指していた阿嘉だが、オーディションの結果選ばれたその他のメンバーは、①ドラムは修理工の水蛙（カエル）

（應蔚民／イン・ウェイミン）、②キーボードはホテルの客室係の明珠（ミンジュ）（林曉培／シノ・リン）の娘で小学生の大大（ダダ）（麥子／マイズ）、③ギターは

台湾の現住民族で警官の勞馬（ローマー）（民雄／ミンシジョン）、④ベースはローマーの父親歐拉朗（丹耐夫正若／ダンナイフージョンルー）だが、ホテルの練習部屋の中で鳴らせる楽器の音はてんでバラバラ。これでは世話役の友子も大変だ。洪議長はベランダに出た友子に対して、「美しい海だろう？なぜ若者が出て行ってしまうのか」とノー天気なことを言っているが、現場は大変。そのうえ、ローマーの父親が交通事故でケガをしたためベースの代役として、80歳の茂（ボー）じいさん（林宗仁／リン・ゾンレン）が登場。この茂じいさんは月琴奏者の国宝らしいが、そもそもベースなんて触ったこともないようだ。そのうえ、阿嘉が作曲すべき曲づくりは一体いつになったら完成？ベースは結局、客家人の営業マンで必死に新製品の醸造酒“馬拉桑（マラスン）”をアピールしているマラスン（馬念先／マー・ニエンシエン）に引き継がれたが、こんな不協和音が続く中、イライラが募った友子はついに大爆発。これにて、新バンドは空中分解。と誰もが思ったが・・・。

■□■美しい海辺でのさまざまな恋模様は？■□■

恋模様の視点から本作を観れば、本作の主人公である阿嘉と友子の恋模様が軸になるのは当然だが、これが互いに若いクセに意外とイライラする展開。飲酒運転はもっての外だし、酒に酔ってぐでぐでんになった女は一般的に見苦しいものだが、本作では友子の酔っぱらいの演技に注目。つまり、海辺で開催された結婚披露宴がクライマックスのライブ前の1つの見どころになる。

十分に聞き取れない台湾語が飛び交う披露宴への疎外感もあって悪酔いした友子と、これも同じく一人宴会を抜け出して夜の海を見つめていた阿嘉との間には面白い情景が。そして、おぼつかない足どりで阿嘉の家にやってきた友子は、やけのやんぱち気味で「阿嘉、出てきなさいよ！なんで私をいじめるのよ！」とそれまで溜まり溜まっていた感情を爆発！それまで互いに何を突っ張っていたの？なぜ率直に自分の弱さを見せなかったの？月明かりの中で結ばれた後になってはホントにそれが不思議だが、結ばれてしまえばそれはどうでもいいこと・・・？

本作は青春群像劇ではなく、あくまで海角七号へ宛てたラブレターを大切な小道具とし、「友子」をキーワードとしたあの時代と今の時代の2つの物語が展開していく映画だが、この海辺の披露宴のシーンでは、面白いキャラの脇役たちのあの恋模様、この恋模様が面白く描かれるからそれにも注目。それにしても、台湾の人たちってどうしてあんなに明るい？

■□■シューベルトの『野ばら』がクライマックスの感動を■□■

日本は世界に類を見ないほど短期間で、そのうえ無血革命に近い形で近代的な明治国家日本をつくりあげたが、それはイコール政治・軍事・経済の他文化面でも西欧化を意味していた。したがって、小学校唱歌でも滝廉太郎など日本独特の曲も採用したが、西欧諸国の有名な曲がたくさん採用された。シューベルトの『野ばら』もその一つだ。



『海角七号／君想う、国境の南』発売・販売元：マクザム
(C) 2008 ARS Film Production. All Rights Reserved.

私は過去韓国に5回、中国に14回、台湾に1回旅行した。中国では今でこそ日本のアニメソングが大人気だが、日本の歌はまだ知られていないし、韓国は恨歌が主流。それに対して台湾では、おじさん、おばさんが公園で歌っているカラオケには日本の曲も多い。それは、台湾人にとって日本による占領・統治は必ずしも悪いことばかりではなく、日本人に対し尊敬と親しみの気持を持っている人がたくさんいるためだ。今や中国でも谷村新司の『昴』や千昌夫の『北国の春』はカラオケの大人気曲だが、何と台湾では茂じいさんは当然として、阿嘉のような若者でもシューベルトの『野ばら』を台湾語で歌えると知って、私はビックリ。

本作はラブレターの朗読のストーリーと、新バンドの結成そしてその中で展開される阿嘉と友子との恋模様というストーリーの間には、友子という共通語以外何の接点もなかったが、フィナーレではシューベルトの『野ばら』によって涙を誘うクライマックスが訪れるからそれに注目！きっとあなたの目からも涙があふれ出るはずだ。そこで心配なのは、果たして今ドキの日本の若者はシューベルトの『野ばら』を知っているの？ということ。

それを知らなければ、台湾ではそんな感動的なフィナーレによってNO1ヒットとなった本作の感動は、ひょっとして日本の若者に伝わらないのでは？

2009（平成21）年11月30日記



「海角七号／君想う、国境の南」

（1月9日から梅田ガーデンシネマで公開）



©2008 ARS Film Production. All Rights Reserved.

なぜ台湾で大ヒット？ この感動を日本でも

海角七号を観た？ そんなあいざつが日常化した台湾のNO.1ヒット作が日本に上陸！ 本作では①敗戦により船で引き揚げる日本人教師が友子という日本人の台湾人女性に宛てたフレター②現代を生きたミュージシャン阿嘉（范逸臣）と売れない日本人モデル友子との恋物語が、同時進行で描かれる。日本に

占領統治されていた朝鮮半島は反日色が依然根強いが、台湾は親日的。それが公園のカラオケで日本の曲を歌っているおじさん達を台湾旅行で見た私の実感だが、本作でもそれが如実だ。

台湾最南端の恒春は町興しのため日本人歌手を招いたが、その前座として「地元民によるバンド演奏が不可欠」

と判断。そこで展開される阿嘉と通訳兼世話係の友子との恋模様やバンドに結集する個性豊かな男たちの青春群像（？）劇は瑞々しい。他方、信書の無断開封は罪だが、郵便配達員の阿嘉はなぜそんな行為を？ またなぜ今ドキ、占領時代の古い住所海角七号に宛てた恋文が存在するの？ 『青い山脈』（1963年）

ベルトの『野ばら』から。いち早く日本が小学唱歌に取り入れたこんな西洋音楽をなぜ台湾人が？ それが本作のミソ。美しい砂浜上の舞台で展開する台湾語と日本語の大合唱は、大晦日恒例の第九の合唱以上に涙を誘う。そんな感動を共有した上で、新たな日中・日台友好のあり方を模索したい。

では「恋しい」の漢字を書き間違えた「変しい変しい新子様」という拙い恋文が笑いを誘ったが、本作のそれは格調高い。あの時代を回想すればそれだけで涙を誘う名文の連続だ。「友子」しか共通項のないそんな2つの物語はいつどんな形で融合を？ 中国語を学ぶため単身渡台した友子役の女優田中千絵に注目。バンド結成のドタバタ劇の中で感情を爆発させた彼女の酔っぱらい演技と、互いの弱みを発露した後の二人の結びれ方は秀逸。これを魏徳聖監督のセンスの見せ所だ。フィナーレの感動はシュ-

大阪日日新聞 2009（平成21）年12月19日